和歌山　静かな町

周　逸
教育学部　交換留学生　中国

日本にいる間、よく聞かれる。「周さんは和歌山についてどう思いますか。」私はいつも「静かな町だと思います。」と答える。「静か」という答えはあまりにも曖昧で、いいところが思いつかないとき使われる感じがする。この答えを聞くと、和歌山の皆は少し不満に思うかもしれない。なんだこいつ、静かより引き付けるところいっぱいあるだろう、という気持ちが相手の顔から見てとれるときもある。だが、和歌山について話そうとするならば、コミュニケーションが苦手な私の感情のすべてを含んだこの三文字は必要なのだ。

「静か」の表面上の意味からみると、和歌山は確かに静かな町である。大阪には近いが、大阪のような繁盛した商業の町にならなかった。逆に、和歌山にあるのはそれほど大きなショピングモールでもない。和歌山に来たばかりのとき、初めて夜に出歩いた。何も食べていなかったので、お食事処を探そうと思ったが、店はほとんど閉まっていた。８時なのに、すごい夜中の感じがした。中国では８時が店の一番混雑の時間だ。私は大阪、京都に行ったときも、８時には人が山ほどで、日本の狭さを感じた。それと比べて、和歌山の静けさに驚かされた。

和歌山とはどんなところかと問われても、これ以上のことは書けない。なぜなら、私は和歌山県で旅をしたことがないからだ。和歌山市でも、会館から学校までの道しか覚えていない。結局、和歌山について具体的な印象はあまり残っていない。それは全部私自身のせいだ。週末に出かけないし、人との交流もしない。最後に和歌山のことを教えてくれる友達一人もない。なので、和歌山について問われるとき、全体的な印象「静か」しか答えられない。

ところで、もう一つよく問われる問題について少し話したい。「なぜ日本にきた？」である。日本の文化を学びたいわけではなく（以前の私は日本のアニメが大好きだったが)、ただ外国に行きたかった。もちろん、来る前に、色んな学習計画を作った。しかし、日本に着くと、同じビルと同じ人通り、飛行機に乗る前とほぼ同じ景色を見て、頭に来た。ここは日本語を喋っている上海じゃん。上海は嫌いなので、言葉が通じない上海がより嫌いなのは当たり前だ。飛行機から降りてまだ 30 分足らずで、もう帰国したかった。そのような私が、和歌山に住んでいる間、和歌山が好きになったのだ。

和歌山人或いは日本人は自分から他人のプライベートを尋ねることはしない。それは私が日本の一番好きなところだ。日本人は私の家庭状況など一切問わない。以前、日本人は内と外をはっきり区別していることを聞いた。確かに、日本人は勝手に他人の領域に踏み込まない。自分の意欲を他人に押し付けない。

私は中国にいるとき、やりたくないことをやらされることがよくあった。大人からのプレッシャーでＮＯを言えない。人が生きている限り、それはやらなくてはいけないことなのだろうか。それは人生なのか。自分の弱さを恨んで、人との交流が嫌いになった。体だけ不自由ならばまだ大丈夫。実際の社会問題と歴史問題では、人と違う意見を持ってはならないのだ。それは中国人の悪い習慣で、絶対に文化とは言えない。しかし、彼らと同じでなければ、「変わり者」とされる。和歌山の人々は性格がばらばらだが、人に乱暴なことはしない。

和歌山に住んでいる間、安らぎを感じた。誰でもプライベートを尋ねない、攻めてこない。他人の領域に踏み込まない日本人は絶対に冷淡ではない。道に迷ったとき話しかけてくれたおじいさん、注文したいとき日本語が読めない私を親切に接待くれた店員さん、和歌山の人々はいつも助けてくれて、異国で家を感じさせる。和歌祭にもみんなと一緒に参加した。すごく楽しかった。静けさが好きな私が、なぜ和歌祭に出たのか、自分も不思議だと思った。ただ、そのとき楽しんでいるみんなの姿をみて、この穏やかな生活を続けてほしいと思った。